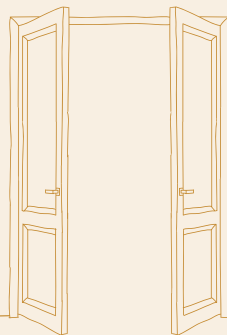


私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.58

東京から山麓の町へ移住し、
こだわりの農作物を生産

元東京消防庁職員

戸崎 明さん (70歳) 2017年退職

【とさきあきら】東京都出身。昭和52年、東京消防庁に入庁し、7つの消防署や本庁組織に勤務。京王線脱線事故、歌舞伎町一番街のビル火災など災害現場を中心に職務に従事した。野方消防署では、災害現場での職務のかたわら、消防水利関係を担当し、首都直下地震に備えるための川堰止め施設、地下調節池を利用した消防水利の開発等に携わる。定年退職後は、(公財)防災救急協会立川防災館で2年間、都民の防災能力推進に努めた。

—戸崎さんは東京消防庁の消防士として、災害現場を中心に仕事をされてきたそうですね。退職後、62歳の時に長野県富士見町に移住し、農業を営まれています。定年後のことについて、どのように考えていたのですか。

若い頃は、「定年退職したら、のんびりしよう」と考えていたんですけどね。ただ、もともと身体を動かすことが好きでしたし、心のどこかに自分の手で農作物を作ってみたいという気持ちがあったんですよ。

—というのも、私は東京都日野市生まれで、子供の頃、祖父にリヤカーで多摩川の河川敷にある畑に連れて行かれ、サツマイモやジャガイモを掘っていました。その時の楽しかった記憶がずっと残っていて、40代の頃から東京都内で畑を借り、家庭菜園で野菜を育て始めました。趣味として続けていきましたが、定年後はもっと広い農地で、もっと色々な農作物を作りたいと思うようになり、移住先の土地を探し始めました。

—ご夫婦で移住されていますけれど、奥さまは反対されなかったのですか。

妻も東京生まれですが、子供の頃、私と同じように農業を身近に感じる経験があったため、二つ返事でOKでした。

—移住先は、どうやって探されたのですか。

『田舎暮らしの本』(宝島社)という情報誌を参考にしながら、最初は茨城県や福島県などの海辺にある土地を探していました。気に入った土地が見つかって購入

しようとしていた矢先、東日本大震災が発生し、津波で甚大な被害を受けました。

—気持ち切り替え海辺の土地を探すのをやめ、山の麓にある土地を探すことにしました。夫婦共通の趣味が登山だったので、山を望める土地もいいんじゃないかと思いついて、いくつか候補地をしぼり田舎暮らしを体験するツアーに参加した結果、長野県富士見町に決め、土地を購入しました。

—富士見町を選ばれた理由は？

東京から、電車でも車でも2時間程度で行き来できる近さと、富士山や南アルプス、八ヶ岳が一望できる景観を気に入ったからです。山麓にありながら、雪害のないことも理由の一つでした。私にとっては富士見町こそが最高だ、と思つて選びました。

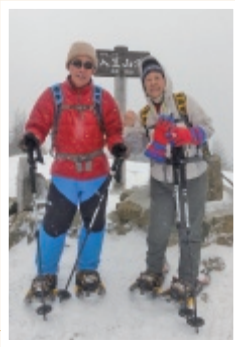
—農地や農機具は、どのように？

農地の購入や借入には農業委員会の許可が必要なので、時間がかかるかもしれないと思つていました。しかし、タイミング良く地元の人に土地所有者を紹介してもらって、問題なく無償で農地の借入ができました。農地の広さは53アール(5300㎡)です。農地を耕すのに必要なトラクターは、中古で2台購入しました。ミニトマトを栽培するための農業用ハウスも建てました。こちらについては、富士見町の定年帰農者支援補助金を活用しました。

—農業には知識や技術も必要ですよ？

初めのうちは、雑誌や本を読んで独学で

農閑期となる冬場は
近くの雪山で登山を
楽しむことも



蕎麦の収穫の様子。
「南アルプスやハケ岳を見ながらの
農作業は、とても楽しいですよ」



刈り取った稲を天日干しした米が「はぜかけ米」。稲を束にまとめて干す作業は手作業
となるため、時間がかかるが、その分、おいしい米ができる

学んでいましたが、今は地域の人々から教わっています。野菜は東京にいた時から長年、家庭菜園で育てていましたが、標高の関係もあるのか、東京と富士見町では植える時期が違うことを知りました。

――農業を始めて、大変だったことは？

体力に自信があった私は、農業はもつと簡単にできる仕事だと思っていました。ところが実際に始めてみたら、田植えや野菜の苗の植え付けだけでなく、収穫の合間に、あぜや土手の草を2週間に1回の頻度で刈らなければならなかったり、田んぼに水を引く水路の清掃や整備をしたり、いろいろな作業があつて非常に労力がかかるんです。

農地が広大なので、草刈りだけでも春から秋までの期間に十数回も行っています。改めて、食べ物を作る大変さを知りました。農作物について当初は多品種少量生産をしていたのですが、作るものが多いと手間がかかり大変でした。今は売れ行きが良く、価格も高く設定できるものを作っています。米、蕎麦を生産する他、サツマイモやジャガイモ、ブルーベリーも栽培しています。米は「つきあかり」というコシヒカリ系の品種、蕎麦は「信濃一号」という品種で、米も蕎麦も天日干ししています。土地に合ったものを、農業不使用、有機栽培にこだわって作っています。

――農業の魅力は何だとお考えですか。

一番は、自分が作ったものを、自分で食べられることです。それと、販売した農作物を食べた人から美味しいと褒められることも、やりがいにつながっています。現在、私が作っている農作物のうち人気があるのは、はぜかけ米と蕎麦です。はぜかけ米は刈り取った稲を天日干しした米で、手間と時間がかかる分、機械乾燥とは違った米のうまみを感じられます。食べた人から「美味しかったです」とお手紙をいただいた時は、すごく嬉しかったですよ。

――ご自身の中に、何か変化はありましたか。

農業を始めたことで、動物に優しくなれたのかなと思っています。例えば、農薬を使わないことであまり虫を殺していません。

たり、農業は地球に優しい仕事かもしれません。昨今、作物に害を及ぼす鹿、イノシシ、猿、ハクビシン等が害獣といわれますが、もとは人間のせいだと思えます。

――農業以外では、どんな活動を？

移住したばかりの頃、家を建ててくれた大工さんが地域の消防団に入っていたことから、消防団員が操作技術を競う「消防団操法大会」の指導をしてくれないかとの話がありました。私は東京都消防操法大会の審査員を務めた経験もあり、協力することにしました。地域の消防団で週2回指導を行った結果、県大会で優勝、46年ぶりの全国大会への出場となり嬉しかったですね。現在は地区の衛生部長として、長野県で行われているリサイクルゴミの収集を月2回ほど行っています。その他、町の社会福祉協議会からの依頼で、リサイクルゴミの回収場所に行けない高齢者のゴミの収集も行っています。

――農業はいつまで続けられるつもりですか。

地域の不耕作地を増やさないためにも、身体が動く限りは続けていきたいと思っています。

――30〜50代の読者に向けてメッセージを。

定年後に移住を考えているなら、まずは色々な場所を見てみることをお勧めします。住んでみないと分からないことは多々あるでしょうが、その地域の景観や自然、地域で暮らす人々を好きになることが一番です。自分に合う場所が必ずありますよ。